主日礼拝説教 「最高の賜物をあなたに」 上竹裕子牧師（前磐城教会牧師）

日本基督教団石神井教会　2018年8月26日

【旧約聖書日課】ホセア書　11章1～9節

1 まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。
2 わたしが彼らを呼び出したのに、彼らはわたしから去って行き
バアルに犠牲をささげ、偶像に香をたいた。
3 エフライムの腕を支えて、歩くことを教えたのは、わたしだ。
しかし、わたしが彼らをいやしたことを彼らは知らなかった。
4 わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き、彼らの顎から軛を取り去り
身をかがめて食べさせた。
5 彼らはエジプトの地に帰ることもできず、アッシリアが彼らの王となる。
彼らが立ち帰ることを拒んだからだ。
6 剣は町々で荒れ狂い、たわ言を言う者を断ち、たくらみのゆえに滅ぼす。
7 わが民はかたくなにわたしに背いている。
たとえ彼らが天に向かって叫んでも、助け起こされることは決してない。
8 ああ、エフライムよ、お前を見捨てることができようか。
イスラエルよ、お前を引き渡すことができようか。
アドマのようにお前を見捨て、ツェボイムのようにすることができようか。
わたしは激しく心を動かされ、憐れみに胸を焼かれる。
9 わたしは、もはや怒りに燃えることなく、エフライムを再び滅ぼすことはしない。
わたしは神であり、人間ではない。お前たちのうちにあって聖なる者。
怒りをもって臨みはしない。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一　12章27節～13章13節

12:27あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。28神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。29皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。30皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。31あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。

そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。13:1たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。2たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。3全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

4愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。5礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。6不義を喜ばず、真実を喜ぶ。7すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

8愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、9わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。10完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。11幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。12わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。13それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

【福音書日課】マルコによる福音書　12章28～34節

28彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」29イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。30心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』31第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」32律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。33そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」34イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

１．キリストの体なる教会へ

説教者として、無任所教師を呼ぶことを不思議に思った方もいらっしゃると思います。わたし自身も、なぜこういうときに聖壇に立たなければならないのだろうかと考えていました。わたしが何の役に立つだろうかと考えていたところでした。わたし自身のいまのことを少しお話ししたいのですが、それまでわたしは、自分がよい働きをしていたと胸を張って言えるわけではありませんが、たぶん普通の牧師でした。普通の牧師って何、という感じかもしれませんが、わたしもうまく言えませんけれども、教会で楽しくやっていました。それが、親しい友人との友情が破れたことがきっかけで、立ち止まらざるをえなくなりました。これまでの働きを一旦すべて辞めなければならなくなりました。自分自身が、どこに身を置いたら良いのかもわからないような状態になってしまいました。神学校を卒業してちょうど 10 年が経ったのですが、伝道者として出発するときには、自分がこのような状態になるとは露も思っていませんでした。できれば、この悩みは過去のこととして、苦しみを乗り越えた者として、ここに立ちたいですが、でも、そうではありませんでした。

皆さんは、今日、どのようなところからここに来られたのでしょうか。落ち着いた豊かさの中から来た人もあれば、困難や煩わしさの中から、どう考えたらよいのかわからない悩みの中から来た人もあると思います。わたしたちが決して整った状態ではない中で、自分が抱えている半端なことを何もかも中断して、こうしてなぜなのか今、この教会に集められている、その中で、今、神の言葉をわたしたちがどう聞くのか、と言うことが問われていると思うのです。わたしたちの日々はまったく違っていながら、しかし、わたしたちはまったく等しい者としてここにいます。

今日は、日本キリスト教団の聖書日課によって示された聖書の言葉をご一緒に聞いています。コリントの信徒への手紙一は、キリストの使徒パウロがコリントの教会に書き送った手紙の一節です。この手紙は、波乱に満ちた手紙です。わたしたちが手にしているものは、第一の手紙ですが、この手紙の他の箇所を読みますと、この手紙の前にも、パウロは教会に手紙を書いているのですね（Ｉコリ 5:9）。その手紙は、現存していないのですが、前に書き送ったその手紙が誤解されてしまったので、もう一度パウロは書かねばならなかったということなのです。またさらに、コリント教会の中に新しい問題も生じていた。この手紙は、パウロが一方的に教理的な論文を書いているとうことではなく、生きて今、動いている、実際に問題が次々に起こっている教会に対して、信仰的に応答している、対話していると言ってよい手紙です。この手紙の中で、パウロが繰り返し指摘していることは、コリント教会の人たちの高ぶりです。自慢や高ぶりによって、教会に分裂が起こっていました。これに対するパウロの応答の鍵となるのが、わたしたちは「体」なのだというイメージです。わたしたちが「キリストの体」だ、ということを土台にして、一つ一つの議論を建て上げていくのですね。

２．愛がなければ

今日のところで、**「神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました」（27 節）**と言われています。この言葉は、この少し前の 18 節、**「神は…体に一つ一つの部分を置かれました」（Ｉコリ 12:18）**という箇所とまったく同じ言葉です。体に一つ一つの異なる部分を置かれたように、神は、教会の中にいろいろな人をお立てになったと言うのですね。体の全部が目では聞くことができないように、全部が耳ではにおいをかぐことができないように、「わたしは目だから重要だ」とか、「わたしは耳だから他より優れている」とかと言うのが的外れなように、わたしたちの間でも**「皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか」（29 節）**。そうではないでしょう。互いに互いを必要としているのだ、と言うのですね。

いろいろな賜物のある人がいます。わたしたちが「賜物」と言うときに、「○○ができる人」という能力を指すことが多いように思います。自分の賜物は何だろうか、と考えるときにも、いつも自分に何ができるか、自分の能力や可能性を考えています。わたしたちは、賜物によって何者かであろうとする、と言ってもよいのかもしれません。なぜこのような言い方になるのかと言いますと、わた

し自身がそうだったからです。賜物は「神からの賜りもの」ですから、本来よいものですが、賜物が力となって、ある種の強さとして、誇りとして、いつの間にか自分を高みに連れていくようなものになってしまうということがあります。それがどんなに教会で貴いとされている霊的な賜物であったとしても、です。

パウロは言います。**「そこで、あなたがたに最高の道を教えます」（31 節）**と。「愛の讃歌」と呼ばれる詩です。たとえ、異言を語ることができたとしても、預言の賜物を持っていたとしても、神秘的な経験や知識が豊富であったとしても、信仰的な実践に熱心で全財産を放棄できるほどであったとしても、どんなに優れた、称賛に価するような霊的な賜物を持っていたとしても、そして、自分自身の命を他の人のために差し出すことができたとしても、何の意味もない。**「愛がなければ」**と、パウロは語ります。**「愛がなければ、無に等しい」（2 節）**と。

この詩は、よく結婚式で朗読される箇所として広く知られています。でも、こうして 12 章から追って来るとわかるように、テキスト自体は、もともとそういう箇所ではないのですね。12 章から 14 章にかけて、パウロは霊的な賜物について語っているのですが、その中心であり、頂点にあるのがこのテキストです。

わたしたちは、賜物を探し、務めを求めます。わたしたちは、いつもこの働きをどう継続できるのか、奉仕の世代交代をどうしていこうか、どうやったら効率的に進めることができるのか、そういったことで頭をいっぱいにします。でも聖書は、極端に言えば、賜物が不足でも、働きが足りなくても、教会は成り立つけれども、でも、愛がなければ、教会は即終わる、息絶えると言っています。あなたたちは目に見える部分を整えようとして、ああでもない、こうでもないと言ってモメているけれども、正しいことをするにも、動機が間違っているなら、全部無意味だと言っているのです。

３．愛の忍耐

それでパウロはこう続けます。**「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」（4～7 節）**。これは、ウエディングの甘い言葉というよりは、パウロの叱責だ、とある人は言いました。なぜならば、パウロはこの手紙の中で、何度も、何度も、教会の人たちの自慢や高ぶりを戒めているからです。**「高ぶっている人たち」（Ｉコリ 4:19）**とか、**「あなたがたは高ぶっている」（Ｉコリ 5:2）**とかという指摘が繰り返し出てきます。教会の中で、礼を欠いた恥ずべき行いがある。自分の利益ばかりを求めているとか、競争でいら立ち、分裂で恨みを深めているとか。これまでの手紙をずっと読んできて、その上でこのページを改めて開きますと、「愛というのは、つまり、今のあなたたちと真逆の状態です」と、パウロが皮肉を言っているようにも聞こえます。

でも、この詩を聞いて、ただコリント教会の人たちの上に雷が落ちた、みたいに言うことはできないと思います。やはり、この言葉は、今日、わたしたちに語られています。パウロは、愛が何でないかを言った後で、愛が何であるのかを言っています。正確には、4 節の初めに、**「愛は忍耐強い…情け深い」**何であるかと言った後で、**「ねたまない…自慢せず、高ぶらない…」**と、何でないのか、否定的な言葉で 8 つのことを語ります。さらにその後で、再び愛が何であるのか、肯定的な言葉で語っています。

こうして見えてくる一つのことは、この詩が、**「忍耐」**と**「耐える」**という言葉で、囲い込まれているということです。聖書が**「耐える」**というとき、**「忍耐」**というときに重要なのは、終わりがあるということです。目の前の好ましくない状況に忍耐するのは、終わりが来る約束を信じるからです。聖書の民は、この約束を信じて旅をしました。長い荒れ野の道を、忍耐して横切って行くことができました。信仰の道は、一朝一夕にならないことに耐える、ということでもあるのだと思います。聖書の預言者はこう語りました。**「人の心は何にもまして、とらえ難く病んでいる」（エレ 17:9）**と。卑屈になったり、高慢になったり、というのは、コリントの人たちのことではなくて、わたしたちのことです。でも、

わたしたちは、途上にある未熟さを忍耐するのです。

愛について友人と話していたときに、こんなことを言っていました。だれでも、愛がないということはないと言うのですね。皆愛は与えられているのだけれども、愛の領域が狭いことが問題なのだ、と。自分の子や家族や親しい友を愛するのは自然にできるが、一歩外に出ると、人に対して平気で無関心でいる、と。先週、別の友人が、教会の備付の聖書のカバーを新しくしたと言っていました。「人の物だと雑に扱うんだよね」と。自分の物でなく、親しい人の物でもなければどうでもよくなる。一歩外に出てしまうと愛が立ちすくむというのは、わたしたちが日常的に経験していることなのではないかと思います。どうやって愛を拡充していくことができるのか。日々のこういう愛の不足が、一朝一夕には満たされない、ということなのだろうと思います。

４．今は、おぼろげに見ている

だから、わたしたちは愛を諦めるのではなく、耐えるのです。聖書の神の民が、約束の地に向かって長い荒れ野の道のりを行くことができたのは、養いがあり、助けがあったからです。ある人は、愛は、学習される行動パターンだと言いました（R.B.ヘイズ）。愛による行動のモデルがあって、理解ある共同体の中で、時間をかけて学ばなければならない、と。そういう意味で、教会が、何よりも、わたしたちの愛の習慣を学び、愛の実践をトレーニングするための学校でなければならない、ということです。

神は、「教会生活の年月は長いけれども、まだひよこです」みたいな謙遜は求めていないと思います。子どもっぽい、ミルクしか飲めない信仰に留まることを、神は望んでいません。わたしたちが幼子だったとき、**「幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた」（11 節）**。このわたしたちに、言葉を増やし、ものごとの見方、考え方を教えた人たちがいて、わたしたちはその人たちとの関わりの中で、確実に成長しました。このように、わたしたちが教会の中で成長して、成熟して、時が来たならば、豊かな実を結ぶように、神はお望みくださっています。最高の賜物として、愛が与えられています。教会で、愛の実践やトレーニングがないとすれば、そのために何年経ってもいつまでもわたしたちが子どもじみた言葉を語っているなら、どんなに建物や組織が立派であっても意味がない、と聖書は語るのです。逆に、忍耐しながら愛の学校であり続けるなら、何がなくても、健やかな教会と言えるのです。

第一コリントの 13 章は、結婚式によく読まれる箇所だけれども、本来の文脈ではそうではなく、信仰共同体を造り上げることを意図して語られている、と申し上げたところでしたが、実際にわたしは結婚の司式でこの箇所を読んだこともあります。結婚式だけでなく、葬儀でこの箇所を読んだこともありました。召された故人の愛唱聖句だったからです。事故で亡くなった方でしたが、あらかじめ、葬儀のための聖書と讃美歌をご自分で決めて、わたしにメモを預けてくださっていました。思いがけない、突然の事故で驚きましたし、大変な悲しみでしたけれども、このみ言葉によって、遺族の方たちも教会も、本当に深い慰めを受け取りました。キリスト者の墓地で、墓石に「愛」とか、「信仰、希望、愛」とかと刻まれている墓石を目にすることがありますけれども、自分の墓石に刻む言葉までは、この方は決めていませんでした。葬儀からしばらく経って、ご遺族がお墓を準備して、どんな言葉を刻んだらよいかと相談にみえました。それで、葬儀のときに一緒に聞いた聖書をふまえて、この 13 章から**「今は…おぼろに映ったものを見ている…」（12 節）**という言葉を選んだのですね。「今は、まだおぼろげに見ている」と。でも、そのときには**「顔と顔とを合わせて」**はっきり見る、という希望のうちに、「いまはまだ完全ではないけれども、ぼんやりと見えている」という言葉を刻んだのですね。故人の信仰をたたえる言葉ではなく、遺されたわたしたちの希望の言葉を刻んでいるのですね。わたしたちは、完全な愛であられるキリストが来る日を約束されています。その日を待ち、教会は愛の灯を燃やしつつ、そのときに向かって急ぐのです。